



稲野 和利

野村ホールディングス  
顧問



「立山に降りおける雪を常夏に見れどもあかず神からならし」(大伴家持『万葉集』)

大伴家持が「越中守」として現在の富山県高岡市伏木に滞在していたのは1270年も前のことだが、私の野村證券富山支店長としての赴任はわずか25年前のことである。在任たかだか2年ではあったが、私自身得難いものを得た。そしてそれは家族にとっても同様であった。

仕事は決して順調だったわけでもないし、赫赫たる<sup>かくかく</sup>成果をあげたわけでもない。バブル崩壊後の不良債権問題や超円高もあり、環境は厳しかった。そして何より、富山のお客さま



家族と(赴任当時)

は鑑識眼が鋭い。若輩者の自分は随分背伸びをしながらあちこち走り回っていたが、その一挙手一投足が見透かされているようで、最初は怖かった。次第に慣れてくると、今度は厳しさの中に温かみを感じるが多くなった。仕事や経済同友会活動を通じて多くの経営者の方々と親交を得、多くのことを学ぶことができたことは、その後自分が経営者になったときに計り知れないプラスの作用をもたらしたと思う。今でも年に1回程度、富山を訪れる機会があるのはうれしいことだ。



黒部湖にて

家族は幸せであった。妻は富山ライフを100%エンジョイした。東京本社勤務時代には片道1時間半の通勤苦に喘いでいた<sup>あえ</sup>私は、職住接近のありがたみを痛感した。ゴルフ場までは所要20分、スキー場までも20分であり、さまざまな観光資源も豊富であった。家族で過ごす休日は潤いに満ちていた。子どもたちは、長男が小学校から中学校、長女が幼稚園から小学校という時期であったが、良き先生たちに恵まれ多くのことを学んだ。富山へ「行きたくない」と言って泣いた二人が、逆に富山を去るときに「戻りたくない」と

泣いて泣いたのは、良き思い出である。

富山の思い出